

胡麻章を読む

——近松浄瑠璃譜本の場合——

坂 本 清 恵

岩波書店から刊行中の「近松全集」は、活字と丸本の影印とを同時に示したもので、今後の本文提供のあり方を変えらるるものであろう。それでは浄瑠璃作品の場合、活字のみではなく、丸本で読むことにはどのような意味があるのだろうか。

丸本翻刻の際、本文の外には、文字で記されている音楽・戯曲構造を示す曲節と、音高を示す「ウ」「ハル」とが活字化される。しかし、胡麻章のみ最後まで活字化されることがなかった。文字譜・胡麻章を合せ、墨譜を解釈する必要性については、近來說かれているところであるが、実際には、文字譜のみを扱い、胡麻章については省かれることが多い。胡麻章が、国語学の資料として扱う以外に、活用の意味を認められていなかったためであろうか。この活字化されることがなかった胡麻章をも読んでいくことに、丸本を読む意味があるのではないか。

この小稿で、胡麻章が「読み」にどのような関りを持てるかについて述べる。

胡麻章は語のアクセントを示すものと、語のアクセントには無関係で句読点と同じ様な働きをするものとの二種のものがある。前者は、節のある曲節において、節のために語のアクセントが崩れ、意味不明にならないようにするもの。後者は、息継ぎ、切れ目を示すもので、なみだ点を補うような、韻律を正す句読点的使用のために施されたもの。このうち「読み」と関係があるのは、前者である。

初期義太夫節において、正本に施された胡麻章は、作曲された当時の大阪アクセントを反映している。胡麻章が語のアクセントを示しているということは、胡麻章の高低により、①仮名書き例の語の意味決定、②漢字表記例の読み方の決定、という二の場合において「読み」を決めることができる。

①②の具体例を近松世話物浄瑠璃からとりあげて、胡麻章を正しく読む必要性を述べることにする。

① 仮名書き例

『今宮の心中』中之巻「灸の場」で、二郎兵衛・きさが主人四郎右衛門に灸をすえ、その間に主人の腰の鍵を盗みとるといふ緊張の一場。

そりやよいはと益引出せばうろたへて。

はしはやひとを取おとすあつや〜。

「はしはやひと」の部分、藤井乙男『近松全集』他、漢字を宛てている注釈書では「端」としている。主人の背中に据えた灸のうち端のものを狼狽えて取り落したということになる。しかし、この部分、胡麻章は「は」に下げ胡麻が施されているので、○●のアクセントで語することを示している。「はし」は同音異義語「端・橋・箸」をアクセントの違いで語り分ける例として、よく取りあげられるが、それぞれ近世大阪アクセントでは「端」第一類で●●、「橋」第三類で●○、「箸」第四類で○●で区別される。胡麻章は「箸」のアクセントを指示したものと考えられる。本文からも当該箇所の灸据えの準備を描写した部分に「くすり〜の灸箸」とあり、「箸」と解釈することに無理はない。狼狽のために手が震え、灸箸に挟んだ火付きの灸をとり落してしまつたと理解でき、先の「端」の場合と比べて、舞台での人形の所作が細かく指示される文となる。胡麻章は、この部分の「はし」が「端」や「橋」でなく「箸」なのだ、アクセントを間違えないよう注意を喚起する一方、意味の注釈も行っていることになる。

この例は、胡麻章を読まなかったために同音異義語を読み違えたことになる。『今宮の心中』は現在廢曲になっており、その演出を知ることにはできないが、現行曲で、この「灸の場」を採り入れていると思われる『新版歌祭文』の「野崎村の段」では、「灸箸」の灸をとり落す部分が正本演出ともない。『今宮の心中』の本文解釈の際、「野崎村の段」の趣向にひかれたものか。

『薩摩歌』「源五兵衛おまん夢分舟」に

かぜのいろはにはほをあげて。はしり行灸はさつまがた

藤井乙男『近松全集』他、「走り行方」として、走りゆく方向は薩摩湯と解釈している。掛詞という注釈はないが、「走り行く」「行方(方向)」と解していることになろう。掛詞がどのようなアクセントで語られるかは、別稿で検討したが、右の例のような掛ける語の下部と掛けられる語の上部が兼用される場合には、兼用部分の直前に休止があり、掛けられる語のアクセントを生かした語り方がされる。この場合、掛けられる語は「行方」であるが、「行方」は「尾崎家本平家正節」●●○、近松「ゆく灸」(博多小女郎波枕)二六ウ5)●●○で、当該部分の胡麻章は、この「行方」を示すものではない。それではこの部分「行方」の意味を読みとるべきではないのであろうか。他にどのような解釈が可能であろうか。

アクセントからは、胡麻章は「灸」に上げ胡麻、「は」に平胡麻で、「江」●○のアクセントを反映すると考えられる。「江」は『図書寮本名義抄』「東」、『尾崎家本平家正節』●●○、『言語国訛』

「江」である。「走り行く江は薩摩湯」で舟が走り行く江は薩摩湯という解釈になる。仮名違いではあるが、アクセントからも意味上も「江」を読みとって良いと思う。

掛詞の発音法で、胡麻章から右の解釈が可能になる。

②漢字表記の例

『夕霧阿波鳴門』の最後の部分

なほ万代の春の空

改作の『夕霧曲輪葺』の最後も同文で、現在ここは「なお、よろづよの」と語られ、加島屋版葺古本にも「なほ万代の春の花」とルビが施されており、「万代」を「よろづよ」の読みは確実。

しかし、近松作品に施されている胡麻章「万代」は「よろづよ」を示すものではない。「よろづよ」のアクセントは『図書寮本名義抄』『平平上平』、近松では「よろづよ」(『卯月の紅葉』一ウ4)「万代」(『堀川波鼓』十四オ3)で、当時、高起式アクセントであったと思われる、当該部分の胡麻章とは合致しない。「万代」を音読みするかどうか。「バンダイ」に確例がないが、「万(バン)」「を前部成素に持つものに」「万事」(『今宮の心中』二七オ1)「ばんじ」(『長町女腹切』三一オ4) ()は『薩摩歌』四七ウ1)等があり、改作とは異なり、近松の作品では「バンダイ」と読むことを指示しているのであろう。

同様に「三度」を胡麻章によって「みたび」と「サンド」に読み分けられそうなものもある。

「サンド」は『尾崎家本平家正節』、現代京都・大阪○○○で、近世大阪も同様のアクセントであったと思われる、近松の作品中、次のものは「サンド」と読むものであろう。

「三ど」(『心中二枚絵草紙』二二ウ5)「三ど」(『淀鯉出世譚』十三オ4)「三度」(『冥途の飛脚』十二オ3)「三度は」(『心中宵庚申』二二ウ3)

「みたび」は江戸時代のアクセントを推定する確例がない。

『観智院本名義抄』に「み」●、「たび」●○。「古今集」で「み」と同様のアクセントを持つ「や」は「やたび」へ上平平とある。秋永一枝氏は、「このアクセントは、複合が強くなれば●○○型から●○○型に移行していくものと思われるが、一般の複合名詞より、変化がおそいものではあるまいか。「やいろ」「やたび」などは数のアクセントを保持して●○○型になる傾向が強いといえそうである。」と述べている。とすると「みたび」も●○○を経、現代京都・大阪のような●○○型になったか。

近松に「三度」(『女殺油地獄』三六ウ4) ()の「山崎与次兵衛壽の門松」(四二ウ3)がある。この例は高起式アクセントを反映したもので、「サンド」ではなく「みたび」と読むべきではなからうか。

「やたび」には先の●○○の例の外、『古今私秘書・頼阿真筆古今集声句点』にへ上上平の例もみられる。●○○ののち、「み」に下降が消えて短く高く発音されるようになり、「たび」のアクセントを生かした●○○型アクセントも存したのではない

か。近松の「みたび」もこの●●○を反映した施譜ではなからうか。なお、この『女殺油地獄』の例は十行本に「三」とあるが、胡麻章が省かれていることから、七行本での胡麻章の指示を無視し、読みを加えたものであろう。

「一人」(『鐘の権三重帷子』四四ウ4)「一人」(『卯月の潤色』十五ウ3)を「ひとり」と読むか、「イチニン」と読むか。

前者は上げ胡麻が、「一」の上部に施されているので、高起式アクセントを反映する。後者も「人」の部分に下げ胡麻が二つ施されているので、「一」の部分は高く発音されることを示している。

「ひとり」のアクセントは、三拍名詞第七類で、「ひとり」

(『丹波与作待夜小室ぶし』四二オ1)と『心中万年草』三三オ5)の『五十年忌歌念仏』四ウ5)等、『尾崎家本平家正節』●●○、近世大阪●●○であったと考えられ、低起式であるから右二例の胡麻章の反映する高起式アクセントとは合わない。

一方、「イチニン」は近松に「杏人」(『堀川波鼓』二二ウ6)

の例、現代京都・大阪●●○で、高起式アクセントであったと思われる。右二例は「イチニン」と読むべきものである。

以上のように胡麻章の反映する語アクセントから、漢字表記の部分の読みを決定できる旨を述べたが、義太夫節の胡麻章は、必ずしも一拍に一つずつ丁寧に施されていないため、読みの決め手にならないこともある。

「弟」(『心中二枚絵草紙』十九ウ1)は胡麻章が四つなので、

「おとうと」「弟」(『鐘の権三重帷子』四八ウ5)は三つなので

「おとと」と読み分けられるが、「弟」(『卯月の紅葉』二二ウ4)「弟も」(『心中万年草』三八ウ2)は上部に胡麻章が何個省かれているのか不明である。「おとうと」のアクセントは『京大本和名抄』「観智院本名義抄」『古今集』「平平平平」で、近世期はアクセント体系変化後の高起式アクセントであろう。「おとと」は『尾崎家本平家正節』●●○で、やはり高起式。よって最後の二例は「おとうと」「おとと」どちらの読みをすべきか、胡麻章による決定はできない。

胡麻章は必ずしも読みの決定的な決め手になるものではないが、補助的役割は果たすことがある。特に①の例などは、単にどう読むか、どう語るかという問題にとどまらず、どう演ずるかということに関わるものもある。本文提供に際し、胡麻章も考慮されている場合、できる限り、胡麻章も読み解く必要がある。

(注)① 浄瑠璃稽古手引書『停雲秘録』(撰者不明政太夫系伝書

『日本庶民文化資料集成』七)の「章の事」にも一橋・端・著」を胡麻章により区別すべきことを述べている。

(2) 「義太夫節の掛詞―近松世話物浄瑠璃譜本を資料にして―」(『国文学研究』93集 昭和62・10)

(3) 『古今和歌集声点本の研究研究篇上』474・475ページ(校倉書房 昭和55・2)

(4) 金田一春彦「国語のアクセントの時代的変遷」(『国語と国文学』37の10 昭和35・10)によると現代京都アクセントは●●○。